



Title	海外の出版物に描かれた日本の建築文化 : 19世紀後半から20世紀初頭にかけてのヨーロッパを中心に
Author(s)	金刺, 礼子
Citation	デザイン理論. 2003, 42, p. 106-107
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52997
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

海外の出版物に描かれた日本の建築文化

— 19世紀後半から20世紀初頭にかけてのヨーロッパを中心に —

金刺礼子／神戸大学

1. はじめに

これまで、日本建築に関するさまざまな文献の著者によって、伝統的な日本の建築と、アールヌーボーからモダニズムに至るヨーロッパの近代建築に、類似性—簡素さ・静けさ・非対称性など—が見られると指摘され、日本建築からヨーロッパの近代建築へ何らかの影響があったのではないかと示唆されてきた。日本から西欧諸国への影響に関しては、「ジャポニスム」の研究によって、日本の浮世絵版画や工芸が欧米に影響を与えたことがすでに明らかにされており、建築に関しても、フランク・ロイド・ライトが浮世絵版画の影響を認め、語っていることが一般に知られている。しかし、“日本の建築からの影響”という視点では、実際何らかの関係が存在したのかどうか、いまだにはっきりしていない。本研究では、“日本の建築からの影響”の確認とまではいかなくとも、歴史的な流れの中で、影響の可能性が認められるような見方や状況が存在したかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究のプロセス

建築の場合、絵画などの他の分野と異なり、影響を明確に示す論証や事例を挙げることは難しい。したがって推測的な図像比較やルーツ探しは避け、当時から変わることなく現在まで残されている、文献や雑誌記事などの文字情報とそこに含まれる図版の分析を中心に、これらを丹念に読み取り、ヨーロッパで近代建築が確立する以前、日本の建築文化がどのように紹介され受容されていたかを考察する。

3. 日本建築を海外に紹介した重要文献

日本が鎖国を撤廃した19世紀後半以降、海外に日本文化を紹介する目的で書かれた文献は把握しきれないほどの数に及ぶが、そのなかには日本建築を扱った文献も多く含まれていた。本研究においてとくに重要と考えられるものを紹介すると、C. Dresser『Japan, its architecture, art and art manufactures』1882, E. S. Morse『Japanese homes and surroundings』1886, J. Brinkmann『Japans Kunst und Kunsthandwerk』1889, J. ConderがR. I. B. A. に発表した3本の論文『Notes -1878- on Japanese Architecture』1878, 『Further notes -1886- on Japanese Architecture』1886, 『Domestic Architecture in Japan』1887, F. Baltzer『Das japanische Haus』1903, 『Die Architektur der Kultbauten Japans』1907, などが挙げられる。

とりわけBaltzerの文献は、技術と工法を含めて本格的に日本建築を海外に紹介した文献としては最も初期のものであると考えられる。Baltzerは日本建築に関して、社寺と住宅についての2冊の本を執筆している。最初に出版したのは住宅に関する本の方であり、そちらは、通史的な建築史の枠にとらわれない、彼の日本建築に対する率直な理解が表れているように思われる。以下、Baltzerの住宅に関する著書『Das japanische Haus (日本の家屋)』に見られる、彼の視点と理解の特徴について触れる。

4. Franz Baltzer の『Das japanische Haus』(Berlin; Wilhelm Ernst & Sohn, 1903) について

4.1 日本家屋に対するバルツァーの視点

バルツァー (Franz Baltzer 1857-1927) は住宅に関して、数奇屋造りや書院造りの流れを持つ住居、武家住宅や町屋など、幅広く取り上げた。しかし、田舎の民家や農家に関してはまったく扱っていない。これは、民家に対する当時の日本人自身の関心も薄かったことから納得できる見解かと思われるが、屋根や自然に囲まれた外観の印象については感じのよいものとして言及している。また彼は、当時日本の建築家の間で盛んにつくられていた西洋館などはまったく扱わず、一般の大工や下級の技師が建てていた、明治期の比較的新しいライフスタイルに対応した数奇屋風の住宅を多く取り上げた。とりわけ、中規模以下の庶民住宅、および2戸1や3戸1の官舎に対する注目は、おそらく日本人の視点からは得られない、外国人であるバルツァーならではの見解として重要視すべきであろう。

『Das japanische Haus』は、徹底した合理的観点からの考察となっている。観念的になることを避け、日本人の習慣や気候風土をよく理解した上で、そこから、機能的な合理性や快適さなどの、理屈に基づいた説明を行っている。彼はこの著作が、当時のヨーロッパにおいて間違いなく評価を得ると確信していたところもある。そのため、日本をまだ見たことのない人にも理解できるように、徹底したモノからの考察となったとも考えられる。

4.2 バルツァーの理解の特徴

単なる配置によって素材そのものの材質をありのままに見せる材料の使用法や、繊細な施しとしての装飾とは異なる、材料の配置による装飾、引き戸の使用によって獲得される開放性と統一性、一定の大きさをもつ畳の

[規格/Schema]、部材の標準化とストックによる建設の迅速さ、茶室の基本的特徴である[簡素さ/Schlichtheit]と[小ささ/Kleinheit]などに高い関心を寄せていることが読み取られる。とくに茶室の特徴について、バルツァーは、それまでのヨーロッパ建築にはなかった新しい建築の知見として詳細に記述し、ヨーロッパの人々に広く伝えようとしたと述べている。また、彼は伊勢神宮については言及しているが、桂離宮については触れていない。このことは、一概に彼の見方を評価する基準になるものとはいえないが、後の時代の人々による見方とも比較していくべきであろう。

5. おわりに

今後はさらに、バルツァーの日本建築に対する理解を、他の文献の著者とも比較していくことが重要と思われる。とくに、バルツァーより20年ほど先行する文献の著者であり、日光東照宮などの装飾的な建築を評価したC. ドレッサー (Christopher Dresser 1834-1904) の見方との比較が、当面の課題として考えられる。